大津百町瓦版

夏　季　号［No．３４］
２０１７年　　７月

発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636
Email：otsu.machiya@gmail.com

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

［ 高札場と休息している駕籠かき細部の所の拡大部分は最後の６ページに掲載しています ］

大津市歴史博物館の楽しみ方

今回は「大津百町瓦版」に投稿の機会を与えていただいたので、私の勤務する大津市歴史博物館の楽しみ方の一つを紹介します。それは、常設展示室の一階、大津百町コーナーにある「札の辻の町並み」復原模型についてです。

大津百町は江戸時代、港町であるとともに東海道五十三次の宿場町としての顔がありました。そして、札の辻には幕府の高札場が設けられ、宿場の中心地として賑わいを見せていました。その風景を縮尺三〇分の一で復元していますので、当時の町家や行き交う人々の様子をリアルに感じていただけます。町家の建物を見ると、間口が狭く奥行きの深い、俗に「鰻の寝床」と呼ばれる構造です。一階には格子、ツシ二階には虫籠窓、屋根の上には排煙口の役割を持った煙出しなど、今でも大津のまちなかに、このような町家を見ることはできます。実は、この町家の屋根瓦の葺き方を、土蔵は本瓦葺き、町家は桟瓦葺きに区別してあるのにお気付きでしょうか。

それはさておき、私が是非お薦めしたいのは、模型に登場する人々です。日陰で休憩している駕籠かきの二人、道で転んでしまった子どもは何か急ぐことがあったのでしょうか。亡くした夫の命日にお参りに来たお坊さんと挨拶を交わすご婦人、高札を眺めている人たち、そのすぐ側には、旅人に荷物を運ぶ人や馬を提供する人馬会所の忙しそうな店先、町家の裏手では、お爺さんが縁側で寝転び、その傍らでお婆さんが繕い物をしています。庭では孫たちが駒回しに興じています。

その一人一人に、なにがしかの物語が、もう少し大袈裟に言えば、その人たちの人生が見えてくるように思われるのです。皆さんも来館されて、この模型の登場人物をじっくりご覧いただき、いろんな物語を考えてみてはいかがでしょう。これが私のお薦めする、町並み模型のとっておきの楽しみ方なのです。

大津市歴史博物館館長　樋爪　修

町家の暮しが日常です

大津市中央2丁目　佐野家

【 正面から見た佐野家　天保９年(1838)築 】

【 母屋の妻側の見事な板塀 】

古い町家を使ってみるのも悪くはない

今回は、大津市中央2丁目(旧大間町)にある佐野家住宅におじゃましました。佐野さん宅については、当会(「大津の町家を考える会」)が1999年に出版した『大津百町物語』に、ご主人から天保9年建築の建物のこと、自営業の『麩前商店』での焼麩の製造について、そして会員が佐野家宅を訪問しての印象等々全体で6ページに亘って書かれています。

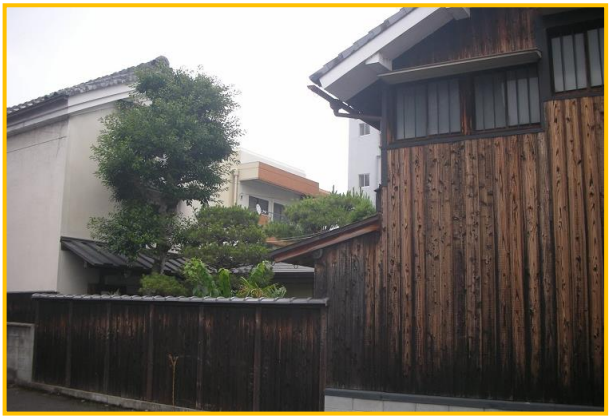
佐野さんは先々代が購入されてからあまり手を入れられてなかったものを、現在の三代目さんが自宅と工場を新築する際、家族が一時仮住まいしていたおりに、意外に夏は涼しく、庭を眺めながら横になっていたりしていると古い家も悪くはないと思われたのがきっかけで徐々に改修されていかれたようです。

当時の様子を『百町物語』に書いておられるのを改めて見てみますと「屋根の葺き替え、通り庭のコンクリート床を剥がし三和土に、漆喰の壁を塗替え、オクドサンを復元し、流しも昔風にと手を入れていきますと、古い家は、みるみる間に正気を取戻し、家自体が生き物のように感じられ、次はこちらにと家の方から求められるように感じました」

「手を入れるたびに、大津壁、栂造り、四方正目の通り柱、くらま石、貴船石、煙りだしの出格子、今では新しく求めるのも大変なものが次々と目の前に現れて来るのを見て、これらのものはやはり保存しなければと思いました」と改修当時のことを語っておられます。

【 鐘馗さんが邪鬼を祓います 】

【 表屋造り の特徴である小屋根 】



【綺麗に改修された 母屋の奥に見える三階蔵】

意識しない町家暮し

もうこの町家での暮らしが40年以上となる佐野さんに、改めて現在の住心地についてお聞きしてみると「ここでの暮らしが日常だから特に意識はしない、家族が集まる場として使い大津祭でも二階から見物する楽しみ、井戸水も使い、階段箪笥も使い、階段にある二階への引戸使いも全てが日常です」と奥さんのお話を聞きました。

考える会の拠点「大津百町館」も同じように、井戸も、二階への引戸も、蔵もあるのを見てもらっていますが、「大津百町館」より60年以上も古い佐野さんのお宅では、まさに日常使いされているのですから、驚くとともに納得しました。

「琵琶湖周航の歌」１００周年

琵琶湖周航は此処から

【 Ａ 三保ヶ崎の旧三高艇庫 】

【 Ｂ 昭和４８年に建てられた記念碑 】

先月６月３０日、びわ湖周航の歌１００年を記念する音楽祭がびわ湖ホールで開催されました。また１００周年を記念する「琵琶湖周航の歌」音楽祭合唱コンクール（高島市民会館）や「琵琶湖周航の歌１００周年記念式典」（高島市民会館、琵琶湖汽船ビアンカ船内）等いろいろな催しが実施されました。

この歌が有名になって、まるで滋賀県民歌のようになったのは加藤登紀子さんが昭和４６年に歌って大ヒットしてからです。いまや滋賀県の歌といえばこの『琵琶湖周航の歌』、誰もが知っていて歌える曲となっています。この歌は当時の三高（現京都大学）ボート部が琵琶湖周航の途中の今津港で、部員の小口太郎氏が詩を披露し、当時流行していた歌のメロディーで歌ったのが始まりだと言われています。

今津（高島市）では早くからこの歌に関しての資料館や歌碑などを造り、『「琵琶湖周航の歌」音楽祭合唱コンクール』などに取組まれてきました。

現在の京都大学ボート部艇庫は龍谷大学や立命館大学等のボート部と同じ瀬田川の唐橋近くにあります。

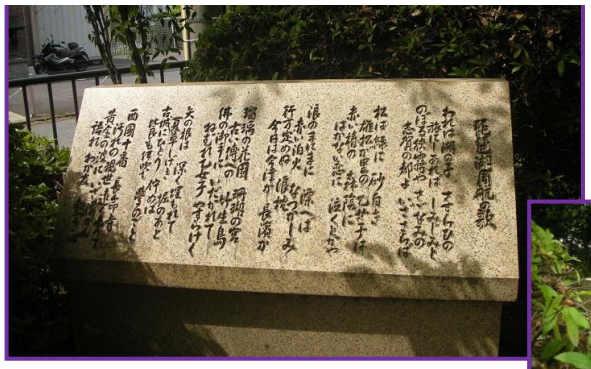
では、この歌の当時の三高（現京都大学）ボート部の艇庫は何処にあったのか？

ご覧の写真Ａは昨年撮影したものですが、現在もはっきりと白いペンキで三高のマークが描かれているのが分かります。この場所は第一疏水の取り入れ口のところで昔から三保ヶ崎と呼ばれていました。向いの「松原ヨットクラブ」のテラスから見たものです。昔は同じような建物が三棟ほど並んであったそうで、此処から艇を出し入れして練習し、琵琶湖周航にも出掛けたのでしょう。この疏水周辺の土地は京都市の市有地で昔は京都の高校や大学の艇庫が幾つかあったそうです。

この「三高艇庫」のすぐ横には、２メートル近い大きな「われは湖の子」と彫られた石碑、写真Ｂがあります。

この碑の後ろには旧三高ボート部の前身である水上運動部が明治２５年に創設されて、翌２６年４月部員有志２１名がこの岬より出でて琵琶湖周航に出掛けた。それから艇を操るもの皆この岬より出でてこの岬に帰って来た。そして大正７年に部員の小口太郎君らが琵琶湖周航の唄を創るや一世を風靡して今日に至ること、琵琶湖周航創始八十周年を記念して昭和４８年にこの碑を有志により建てたと書かれています。さらにすぐ近くには琵琶湖周航の歌詞が書かれた石碑、その後ろには三高の校章が彫られています。

琵琶湖周航の唄の原点は、ここにこそあるのだと改めて知ることが出来ました。



【 歌詞の書かれた石碑と裏の三高校章 】

西国三十三所草創1300年

今年は、日本最古の霊場とされる西国三十三所の草創１３００年の記念の年として、各札所では様々な行事が行われています。大津市内にある巡礼札所の十二番札所・岩間寺、十三番札所・石山寺、十四番札所・三井寺も例年以上に巡礼される方が多いようです。

第十二番札所 岩間山・正法寺

岩間山・正法寺、通称岩間寺は岩間山 443Mの中腹にある真言宗醍醐派のお寺です。泰澄大師が養老六（722）年開創され、境内の桂の大樹で等身大の千手観音像を刻み、元正天皇の御念持仏を胎内に納めて本尊とされたと云われています。その切株から再び芽生えた桂の樹は現在も夫婦桂の名で霊木として本堂前に残っています。

現在の本堂は天正五（1577）年に再建され、毎月１７日に法要が営まれており、特に５月と１０月は素焼きの皿にもぐさを置いたボケ封じと紫燈護摩供がおこなわれています。

この本堂横にある池は、芭蕉が大津市国分にある幻住庵にこもっていたとき、岩間寺に日参しているなかで、「古池や蛙飛び込む水の音」という名句を詠んだ池と云われています。

岩間寺は石山駅からも遠く瀬田川沿いのバス停からでも歩いて５０分といくのも大変ですが、毎月１７日の法要日は石山駅から無料シャトルバスが運行されています。

【 写真は４枚とも編集部が撮影 】

第十三番札所 石光山･石山寺

石山寺は、紫式部がここで源氏物語を書いたと言われていることで全国に知られています。奈良大仏を建立した聖武天皇の勅願で良弁僧正が開基されました。源頼朝の寄進により建てられた東大門は重要文化財になっています。本堂は再々建ですが平安時代（永長元年 1096 年）の建物で、県内最古の木造建築で国宝です。さらに同じく源頼朝が寄進した多宝塔も国宝に指定されています。

ここのご本尊、如意輪観世音菩薩像は昨年３３年に一度のご開扉が行われ多くの方が参詣されたと思います。

特に昨年のご開扉では、平成１４年の国立博物館の調査により同像より遡る、飛鳥時代～天平時代の金銅仏四軀が厨子に納められ胎内から発見されました。一軀は聖徳太子から伝わった尊像とされ、この貴重な小さな金銅仏も公開されました。

紫式部が参籠し「源氏物語」を起筆したという源氏の間は、元々は天皇、貴族、高僧の参拝や参籠に使用されていたものですが、のちに人形司による紫式部の像が置かれ、火灯窓から参籠の様子が見られるようになって、『源氏の間』と云われています。

西国三十三所草創1300年

第十四番札所 長等山・三井寺

三井寺は、７世紀に天智天皇ゆかりの寺として大友皇子の息子、大友村主与太王によって創建されたといわれています。当時から御井(三井)と呼ばれる湧水が豊富に湧いていたことから、この霊泉が天智・天武・持統の三帝が誕生のときに御産湯に使われたと言うことで三井寺とも呼ばれています。

三井寺の観音堂は高台にあって、昔から広々とした琵琶湖の風景を一望にできる景勝地にあることから、江戸期から現代まで多くの絵画や写真が残されています。

ここの観音堂は当初現在地よりずっと上の長等山山中にあったそうですが、１５世紀庶民信仰が盛んになって参拝者が増えてくるなかで、文明年間(1469～86年)に現在地に移されました。もともと三井寺は女人禁制でしたが、観音堂は善男善女誰もが参詣に訪れることができ、現在の観音堂へ上がる百四十四段の石段のあるところが表坂といわれていました。

この階段を上がった所は三井寺南院と呼ばれ、観音堂には本尊の如意輪観世音坐像・愛染明王坐像・毘沙門天立像が静かに佇み、その観音堂を中心に百体堂・観月舞台・鐘楼・絵馬堂・地蔵堂・手水舎と県や市指定の文化財が並んでいます。

【 写真は三井寺ホームページより 】

徒歩による三十三所巡礼

特に今年は草創１３００年にあたる年ということで、現在のように自動車や電車等を使わず、明治以前と同じように徒歩による三十三所巡礼の行事が昨年から特別に行われています。

今回の徒歩巡礼は昨年５月、一番札所の青岸渡寺(和歌山県・那智山)を出発して、三十三番札所の岐阜県・華厳寺まで、７府県約一千キロを来年３月まで三年掛かりで歩く計画になっています。徒歩巡礼として日程毎にコースが決められていて、一般の方も申し込めば参加出来るそうです。

大津市内の三札所にも巡礼

この三十三所徒歩巡礼の一行が、５月２３日山科の醍醐寺から山を越えて大津市の岩間山・正法寺にお詣りされてそのあと石山寺に参詣されました。

翌日２４日には石山寺から三井寺へと巡礼、次の札所である清水寺に向って出立されたそうです。

そもそも巡礼は、仏教伝来以前の古代から山には神が宿るとされてきたなか、その山を修行の場として心霊と一体となることを目指した日本独自の自然宗教でそれが修験道だと云われています。

修験道は、七世紀末役行者が開いたと言われ、役行者は空を飛んだり、奈良の山と山とに橋を架けたりと、伝説に彩られた人物ですが呪術を使って民衆を惑わしたとのかどで、文武天皇三(６９９)年に伊豆に流されたとの記録が『続日本記』にあります。

もともと巡礼は、観音を祀る寺院である霊場を巡ることが修行を積む僧侶のものでありました。それが四国や東国等にもいろいろな形での観音巡礼コースが広がるなか、１５世紀頃より一般民衆も観音礼拝に参加するようになりました。こうして四国八十八ヶ所霊場会、坂東三十三観音、秩父三十四観音等々いろいろな地方で観音巡礼が出来てくるなかで、「西国」の呼称も付けられて現在の『西国三十三所コース』が生まれました。

大津絵はびわ湖も見えないところで描かれ売られていた

「大津絵」は今も全国的に有名で、考える会の拠点となっている大津百町館にも「大津絵は何処に行けば観られるのか？」と訪ねて来られる方も多いです。
地元でありながら「大津絵」の常設展示している所は私は「円満院」かしか知りません。しかも旧大津の町中に大津絵がいたる所で観られるかといえばそんな風でもなく、淋しい限りです。

そもそも大津絵は、慶長７年(1602)東本願寺の創建に伴い（本願寺の門前にあった）絵師、仏画師たちが追分・大谷付近に移住を余儀なくされそこで描き始めたもので、当初は追分絵、山科絵とも呼ばれて仏画が中心でした。そのうち各地の土産物競争の中で、画題を替え美人画や役者絵、動物や鬼を擬人化させた風刺画として土産物人気No.1になって全国に広まっていったようです。

追分・大谷辺りは確かに大津代官所が所轄する大津百町内ではありますが、「大津絵」はこうしたびわ湖も見えないところで描かれ売られていました。

「大津絵」は客の注文に応じてその場で描いて見せたといいます。「速い安い」が身上で、一般庶民にも旅が広がるなか都に来る人帰る人、大勢の旅人が大津絵を土産として求め全国に持って帰られたからこそ、現代に至っても「大津絵」に触れてみたいと来られる人が多いのでしょう。

大谷にある共同墓地に「大津絵師の墓」と書かれた何基かの墓石があります。

その場所は分かりにくい場所で、京阪京津線大谷駅から少し京都方面へ行ったところで、国道１号線を渡り、京阪線路を越え、名神高速道路の下を潜っていったところにあります。

ここ追分・大谷には多くの大津絵の絵師や、刷る作業をする人々が住まいしていたのですから、そうした人々のお墓も有って当然と思いました。

こうして広まった「大津絵」は、浮世絵や歌舞伎の見立て、果ては西洋絵画にも影響を与えたことが分かってきました。最近ではフランス人であるクリストフ・マルケさんが『大津絵―民衆的風刺の世界』という本を出版されたとかで大津市から「びわ湖大津ＰＲ大使」に任命されたそうです。

［ トップページから「札の辻の町並み」復元模型の拡大部分 ］

【 日陰で休息している駕篭かきの二人 】

【 高札場を眺めている人々 】

編集後記

夏季号は６ページに復活しました。「琵琶湖周航の歌」関連で三保ヶ崎の京大艇庫を取り上げこれはトピックだと思っていましたが、あとから一般新聞に掲載され二番煎じとなって悔しい思いをしています。表紙記事は大津市歴史博物館の樋爪館長にお願いしましたが、お話を読んで復元模型を再度見にいかなければと思っています。また、大津絵については今秋に『萬塾』での講座を予定しています。　［Ｋ．Ａ］